

機関番号：13103

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530812

研究課題名 (和文) 成立期の世界史教育に関する総合的研究

研究課題名 (英文) A Study on the early formative period of the World History Education in postwar Japan

研究代表者

茨木 智志 (IBARAKI SATOSHI)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：30324023

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、戦後教育改革期において成立した世界史教育がいかなるものであったのかを総合的に考察したものである。1949年4月に実施された世界史教育の背景、成立、当初の展開などに関する史料を収集し、分析を進めた。その結果、新制高校の創設に関わり新たな歴史教育として世界史教育が想定され、多くの困難の中で様々な模索が継続されていたことなどが確認された。

研究成果の概要 (英文)：

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：世界史教育、世界史教育史、歴史教育史、社会科教育史、戦後教育改革、高校社会科、世界史教科書

1. 研究開始当初の背景

世界史教育の議論もしくは世界史の内容を含めた歴史教育の議論がなされる際に、世界史の教育がどのように始まり、どのように進められてきたのか、つまり世界史教育史を踏まえた検討は不十分なままであった。

それは、戦後に始められた世界史教育が成立経緯から不明確であったことに一因がある。しかも、従来の東洋史と西洋史を単純に一緒にしたという伝聞に基づいたと思われる当時の一部歴史研究者の言説が独り歩きし、それが今日でも特に歴史学界において流

布している状況にある。

世界史教育の成立は、可能な限り実証的な姿勢で、幅広く様々な要素を総合的に検討する必要がある。そのような基礎研究の欠如を補うことが、これからの世界史教育、さらには歴史教育の検討には不可欠である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後教育改革期において成立した世界史教育がいかなるものであったのかを総合的に解明することにある。

具体的には、1948年10月に設置が発表され、1949年4月から新制高校で実施された世界史について、およそ1952年4月前後までを対象にして、科目設置の経緯、学習指導要領の作成過程と内容、授業の実態、教師や生徒の対応、参考書として発行された教科書の状況、世界史をめぐる論議の位置づけなど、多方面から分析することで、世界史教育が成立期に持っていた謂わば原点を明らかにする。これにより、世界史教育の意義を再確認するとともに、これからの世界史教育を検討するための共通認識の形成を目指した。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するため、特に教育行政に関わるものと授業等に関わるものの2つの対象について分析を進めた。

具体的に、前者では、新科目である世界史の科目設置経緯や世界史に関わる通達、世界史教科書検定基準などを通して世界史教育に関わる教育行政による施策を検討し、後者では、多くの非公式な世界史教科書（準教科書）や参考書の発行状況や内容の特徴を通して世界史教育の試みを検討した。

主要な史料としては文部省や占領軍の史料、各種出版物、教科書・準教科書、雑誌記事などがあげられる。関連して、世界史教育史に関わる各種の史料、世界史教育史研究のあり方、世界史教育史から見た社会科教育の様々な特徴などを検討した。

以上のような方法で研究を進めることにより、成立期の世界史教育を総合的に考察した。

4. 研究成果

本研究での成果には以下のようなものがある。

(1) 成立期の世界史教科書の特徴

① 成立期の世界史準教科書

世界史実施当時において、世界史の正式な教科書は存在しなかった。1947年に外国史用の西洋史教科書の前半部分のみが発行されていただけであった。しかも、検定世界史教科書は1952年4月まで発行されなかった。そのため、その間は、準教科書と呼ばれる正式ではないが、授業用に作成された世界史教科書が使用された。本研究では、当時の教科書目録を確認した上で、そこには記載されていないながらも世界史として発行されていた様々な著作物を整理した。さらに、世界史の準教科書と考えられるものを発行時期やその記述や構成の性格で整理し、世界史準教科書の全体的な特徴に加え、準教科書を場とした当時の世界史教育のあり方の検討について分析した。その結果、東洋史と西洋史を組み合わせる世界史としたようなものがある一方で、準教科書を舞台とした世界史教育への様々な試みがなされていたことが確認された。関連して、特にカトリック教会が手掛けた西洋史・世界史の試みについては、入

手した史料を公開するとともに、歴史教育史の観点からのその位置づけを提示した。

②成立期の世界史教科書検定基準

また、世界史教科書研究の前提となる教科書検定基準についての研究を進めた。まず、書誌的な検討を通して、官報に記載された検定基準がすべてではなく、刊行物としての検定基準により具体的な改訂が行われていたことを明示した。このことは他の教科目も同様であり、今後の研究が待たれる。そして、それらの中の世界史検定基準の検討により、最初の検定基準で世界史教科書のあり方を詳細に提示しようとしていたことや、具体的な検定がどの基準で行われたのかを考察した。

(2) 高校社会科世界史の科目設置

高校社会科の世界史科目設置に関わる史料収集と分析を進めた。

国立教育政策研究所および国立国会図書館で所蔵されている当時の文部省とCIE教育課の史料を中心に世界史科目設置に関わる情報を探索した。ただし、その他の史料も含めて、直接的に世界史設置に触れた史料を見出すことは現時点でもできていない。その一方で、世界史が設置された高校教科課程改正に関わる情報、関連する教科書発行や検定、当時の言説やその後の回想などの整理を含めて、現時点で確認できる世界史設置の経緯を考察した。

その結果、世界史科目設置は、新制高校の理念を内容面から実現するための1948年10月の高校教科課程改正の中で実現したことを重視すべきこと、このことは国民共通教養の観点から世界史科目設置を捉えるべきことを意味していること、詳細は不明なままでありながらも、このような位置づけの中で世

界史科目が検討されて設置が実現されたと推測されること、さらに世界史教育および世界史研究のその後の展開の出発点になっていることなどを指摘した。

(3) 世界史設置後の教育行政による対応

高校社会科世界史の設置後における教育行政の対応に関わる史料収集と分析を進めた。その考察を通じて、教育行政は新たな科目である世界史の社会科教育としての理念や方法を教科書や学習指導要領を通じて実現するための努力に取り組んでいたことが確認できた。

ただし、検定教科書や学習指導要領の発行は予定よりも大幅に遅れた。さらに内容面での世界史のあり方の提示は、当時の社会科学習をめぐる思潮や教育行政の役割などの状況下において、さほど注意が払われていなかった。このような教育行政による世界史への対応が、具体的な世界史教育にいかなる影響を及ぼしていたのかは今後の検討課題となる。

(4) 世界史成立史研究のあり方

世界史成立史を研究することとは別に、世界史成立史研究のあり方の検討を進めた。

上述のように、高校社会科の世界史の設置経緯に関しては、直接的な資料が乏しく、当時から様々な推測を交えた言説が語られてきた。その問題点を指摘した上で、逆に特定の回想を無批判に軸に据えた考察も問題であることを指摘すると同時に、現時点での研究状況から見た世界史設置経緯を示し、識者の判断を仰いだ。

(5) 世界史教師へのインタビュー

当時において高校の世界史教育に携わった歴史教師の方々に聞き取り調査を行なった。

戦時中の体験から戦後の新制高校での歴史教育の活動を含め、その調査の結果をまとめ、インタビューの記録として公表した。

(6) その他の史料収集と戦後社会科教育の中の世界史教育

世界史教育に関するその他の各種の史料の収集に努めた。その中で、世界史に関連した大学入学試験の制度や実際に関する情報、科目設置に触発された歴史研究者による世界史をめぐる論議の史料、世界史等に関わる参考書などを収集し、当時の世界史教育を多様な側面から分析するための基礎作業を進めた。また、関連する雑誌の目録の作成を行った。

関連して、現在までの社会科教育全体の中で、小学校・中学校・高校での世界史についての教育がいかなる変遷を経て、どのような特徴を持つものになっているのかを分析した。その結果、世界史の教育が現在において高校に限定された存在になっていることを提示した上で、世界史の内容のない社会科教育の意味を批判的に検討すべきことを主張した。

(7) 本研究の成果のまとめと研究成果の公表

以上の研究成果の一端は学会・研究会での口頭発表、学術雑誌等での発表を通じて公表し、批判を仰いだ。

その中で、高校世界史は戦後の新制高校の理念の実現を図るための教科課程の検討過程で現れたものであること、現在と比べると非常に多種多様な世界史が想定され、敗戦後の様々な困難な中で取り組まれていたこと、しかも、世界史は全く新しい歴史教育であったこと、しかし、その一方で東洋史・西洋史が世界史に大きな影響を与え続けたこと、さらに世界史教育成立史の研究は可能な限り

実証的な方法を取るべきこと、などを主張した。

世界史教育は、敗戦後の新たな日本社会を再建するために重要な役割を果たすことを期待された存在であった。そして、その実現のための努力がこの当時から精力的に始められ、今日まで継続されている。

なお、発表した論文等の一部は『成立期の世界史教育に関する総合的研究 2008(平成20)～2010(平成22)年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』(2011年3月)として発行し、また、一部の論文等は上越教育大学附属図書館リポジトリでも公開した (<http://repository.lib.juen.ac.jp/>)。

(8) 本研究の位置づけと今後の展望

これまで十分な研究が及んでいなかった世界史教育成立史に対して、本研究は1946年ごろの敗戦後の外国史教育の状況から、世界史学習指導要領の作成と世界史検定教科書の発行がなされた1952年4月前後までを対象にして、総合的な検討を加えたものである。

本研究では、前項で列挙したような成果を上げることができた。全体として、実証的な研究を目指した。もちろん歴史研究において実証的であることは当然である。しかし、前述したように、世界史成立について語られる独り歩きした言説をいかに相対化するかが本研究の大きな課題であった。この点に関して、本研究が世界史成立史の解明に多少なりとも寄与できたものと考えられる。

一方で、いまだ検討の及んでいない部分も残されている。また、その後の世界史教育の展開も含めて、今後の課題として取り組む必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 茨木智志、「世界史」成立史研究のあり方について—木崎弘美論文への批判を通して—、歴史学研究、査読有、第871号、2010年、38-44頁。
- ② 茨木智志、成立期における高校社会科「世界史」の特徴に関する一考察—科目の設置と文部行政による対応に焦点を当てて—、社会科研究、査読有、第72号、2010年、11-20頁。
- ③ 茨木智志、戦後社会科における世界史の教育、社会科教育研究、査読有、第107号、2009年、5-14頁。

（その他、雑誌論文等合計13）

〔学会発表〕（計3件）

- ① 茨木智志、成立期における「世界史」教科書検定基準に関する基礎的考察、総合歴史教育研究会第45回大会、2009年8月23日、東京都文京区（茗溪会館）。
- ② 茨木智志、「社会科世界史」はどのようにして始まったか、歴史学研究会2009年度大会特設部会「社会科世界史60年」、2009年5月24日、東京都八王子市（中央大学多摩キャンパス）。
- ③ 茨木智志、戦後社会科における〈世界史の教育〉、日本社会科教育学会第58回全国研究大会シンポジウム、2008年10月11日、滋賀県大津市（滋賀大学教育学部）。

（その他、学会等発表合計8）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

茨木 智志 (IBARAKI SATOSHI)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
准教授
研究者番号：30324023

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者